

まえがき

あれから一年。あの日のことは忘れてしまいたいと思うものの、悪夢の傷跡はいたるところに残り、安らかならぬ現実の姿を突き付けてきます。しかし、そんな中でも、街も人もずいぶんと明るさを取り戻してきました。学校も表面の傷跡を繕い、それなりの日常化のなかで、穏やかな一日を感じることもあるほどになりました。この一年、この三百六十五日ほど心に残る日々もないでしょう。瓦礫の中からの再起。手探りの悪戦苦闘。途方に暮れながらの一步の前進。そうやってお互い今日まで歩いてきました。そのあゆみの日々を「決して忘れられない日々」として、記録に残しておこう、というところから、この小冊子が生まれることになりました。取り掛かりが遅れて、記録がどこかへいったり、細かいことの辻つまが合わなくなったりで、万全のものとはなりませんでしたが。ただ、客観的な記録より、その時私たちは何を考え、何をしたか、その時どう感じ、どう考えたか、そうした心の記録がたどれたらという思いで編集しました。ですから、それぞれの学年の生徒の記録を中心に置いていきます。どの学年も、学校再開後すぐに震災の体験を文章に綴り、文集を作っています。もちろん、衝撃的な出来事に心のバランスを失いがちな生徒たちが、経験を書くことで心の整理をし、新たに出発していこうということで書かれたものです。本当はそのすべてを載せたいのですが、膨大なものになりますので、学年ごとの頁を設けて、それぞれの学年で自由に編集してもらいました。合わせて、保護者の方々にも親の立場からの経験を寄せていただきました。それに、学校の立場で、教職員たちの取り組みの記録、法人本部の記録、汲温会の同窓生の方々の記録を合わせて、総合的に中高関係の全体像をすこしでも見えるようにしたいという編集方針をとりました。学校としても、ここに表れない様々なことがあります。そうした神史は、いろんな人がいろんな場所で語り継いでいくことだろうと思います。巻末に若干の頁を空けてあります。それぞれにご自分の記録をここに残していただいて、さらに内容の豊かな冊子にしてくださいましたら、これに勝る幸せはありません。

尊い命を失われた方々のご冥福をお祈りし、被災者の方々が一日も早く立ち直られるように願いつつ、巻頭の言といたします。